

暴力では何も解決しない

今月の15日、大津市の沢村憲次教育長が私立大学の男子学生にハンマーで殴られ頭蓋骨を骨折するという事件が発生しました。事件を起こした男子大学生は、滋賀県警によって殺人未遂容疑で逮捕されています。

「暴力では何も解決することができない」という事は、自明の理のはずです。にもかかわらず、今回もまた、全く自己中心的な思い込みと独善によって暴力事件が発生したことは、遺憾の極みです。

逮捕された男子大学生は、調べに対して「大津市の中学生のいじめ自殺問題に関して、教育長が真実を隠していると思い、許せなかった。殺そうと思った。」と供述しています（8月15日付朝日新聞）。彼は、市教委の定例会を傍聴し沢村教育長を確認する等、事前に周到な準備をしており、計画的な犯行ではありますが、やった行為自体は「頭に来たから殴った」という類の、誠に幼稚なものだといわざるを得ません。

同時に、今回の事件を通じてもう一つ大きな問題が浮かび上がって来ました。それは、沢村教育長がハンマーで殴られ負傷した事件の直後から、市教委に多数の苦情電話やメールが寄せられています。その中の多くが襲撃を当然とする内容だったという事です。

如何に、いじめ問題に対する市教委の対応に不満があるとしても、だからといって暴力を持って市教委を攻撃しても問題は何も解決しないことは火を見るより明らかです。

どんな理屈をこね回しても、暴力が許されるはずはありませんが、にもかかわらず、教育長に対する暴力行為を容認する空気が漂うことに危機感を感じます。

今回の事件は、大津市のいじめ問題について第三者調査委員会による調査が始まる矢先に引き起こされました。

万が一、沢村教育長が亡くなるような事になれば、第三者による調査にも支障が生じる可能性があります。大学生の行為は、何の問題解決にも繋がらないばかりか、世間の目をいじめ問題の核心から逸らすことにもなりかねません。

大津市のいじめ問題については、教育委員会の仕組みや学校の体質、学校運営のあり方など、構造的な問題も含めてしっかりと検証する事が必要なのであり、決して沢村教育長のリーダーシップといった問題に矮小化してはなりません。にもかかわらず、今回の沢村教育長襲撃事件を容認する声の存在は、弱いところを皆で攻撃して溜飲を下げる、まるで社会全体がいじめの連鎖に繋がれているように感じられてなりません。

今一番しなければならない事は、いじめ問題の事実関係や構造的な問題をしっかりと解明し、再発防止に全力で取り組む事であり、この事を置いて他にはない事を肝に銘ずべきであると思っています。(塾頭 吉田 洋一)